

(解説) 河合塾「学びみらい PASS」の学力の三要素タイプを「トランジションタイプ」へ再分類

1. 目的

河合塾「学びみらい PASS」の結果としてフィードバックされる学力の三要素タイプを、学校から仕事・社会へのトランジション（移行）の観点から、上中下の「トランジションタイプ」へと再分類する。言い換えれば、大学進学後、将来の仕事・社会で学び成長する（しない）と予想されるタイプはどれかという観点からの再分類である。

2. トランジションタイプへ再分類

学びみらい PASS の受験後、学力の三要素タイプは下記の8つでフィードバックされる。

- ・ ○○○
- ・ ○○△
- ・ ○△○
- ・ ○△△
- ・ △○○
- ・ △○△
- ・ △△○
- ・ △△△

※学力の三要素タイプは、以下の指標の得点から河合塾が高群（○）、低群（△）と判定して組み合わせたもの

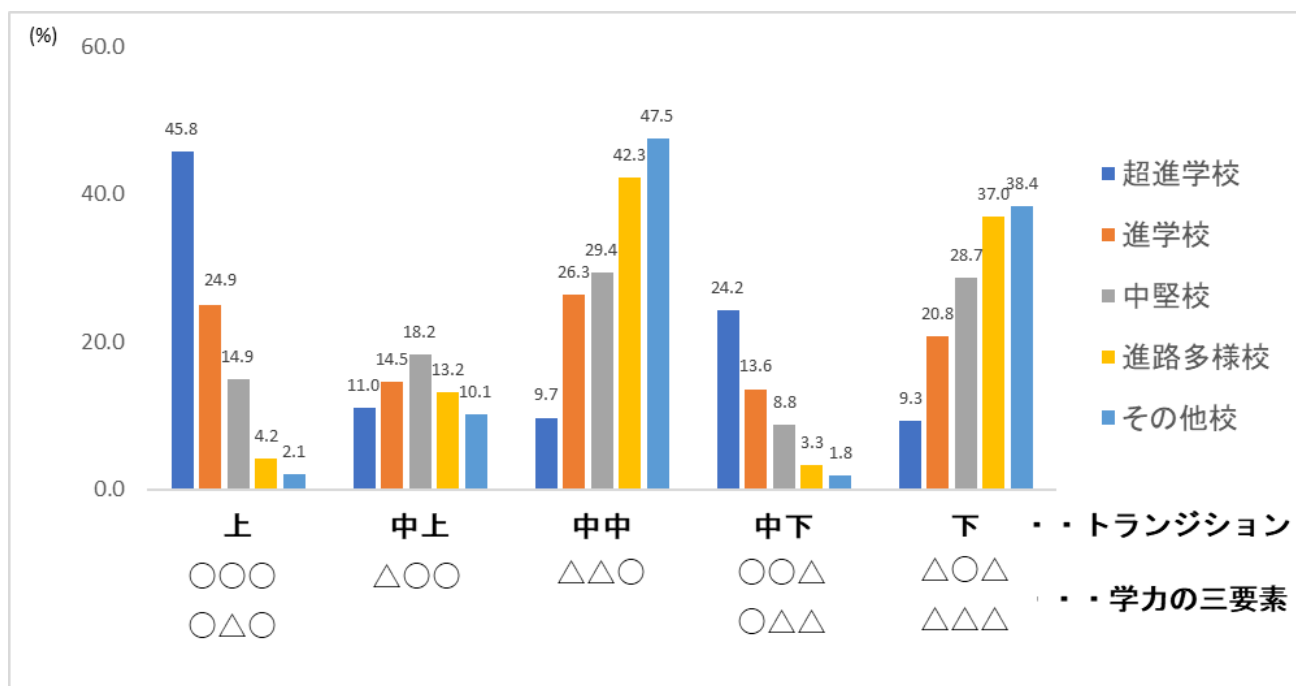
(1) 教科学力（英語・数学・日本語）

(2) リテラシー（情報収集力・情報分析力・課題発見力・構想力）

(3) コンピテンシー（対人・對自己・対課題）

(例) ○△○・・・教科学力（高）＋リテラシー（低）＋コンピテンシー（高）

※指標の説明はページ最後の資料を参照のこと



図表1 「学力的三要素タイプ」と「トランジションタイプ」の対応

*数値は、学校法人河合塾アセスメント事業推進部より提供（2018年度）。高1生から高3生の合算データによる平均値である。

ここでは、8つの学力の三要素タイプを、「上」「中上」「中中」「中下」「下」の5つのトランジションタイプに再分類する。

図表1は再分類における対応図であり、学校法人河合塾アセスメント事業推進部より提供いただいたデータをもとに、全国の高校別（超進学校～その他校）のトランジションタイプの割合を付したものである。たとえば、超進学校の生徒で最も多く見られるトランジションタイプは「上」（45.8%）であり、最も少ないトランジションタイプは「下」（9.3%）である。しかし、超進学校でも「中下」の生徒が24.2%もいる。「中下」の生徒は、教科学力は高いがコンピテンシーが低く、大学進学後、さらに仕事・社会への移行後の学びと成長が弱いと予想されるトランジションタイプである。

3. なぜこのように再分類したか

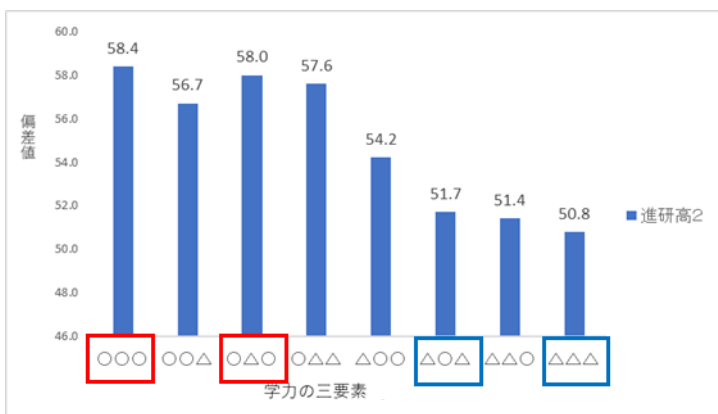
（ステップ1）

高校2年生から10年間追跡調査している10年トランジション調査の結果（溝上慎一監修, 2018、最新の調査レポートは <https://be-a-learner.com/5296/> を参照）に基づいて、トランジションを力強く果たすためには、（1）教科学力に加えて、とくに（3）コンピテンシーが必要であると考えられる。この観点から見れば、○*○の組み合わせがトランジションの観点からは「上」であり、△*△の組み合わせが「下」である。具体的には下記の通りとなる。

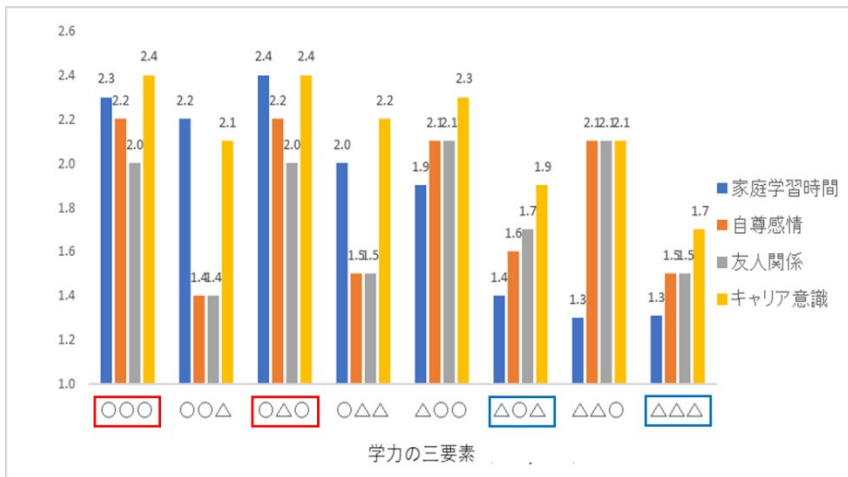


「進研模試」（ベネッセコーポレーション）の結果（偏差値）と学びみらいPASSのLEADSにある「家庭学習時間」「自尊感情」「友人関係」「キャリア意識」の指標を用いて、関連を見ておこう。**図表2**に進研模試との関連を、**図表3**にLEADS各種指標との関連を示す。データは、桐蔭学園の高2生（2018年時）のものを用いている。

図表を見ると、「上」（○○○、○△○）は進研模試の偏差値が高く、LEADSのすべての指標において高い得点を示している。他方、「下」（△○△、△△△）は偏差値が低く、LEADSのすべての指標において低い得点を示している。



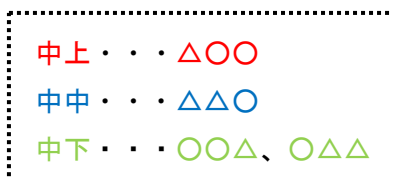
図表2 学力の三要素タイプと進研模試との関連



図表3 学力の三要素タイプとLEADS各種指標との関連
*「家庭学習時間」～「キャリア意識」の得点は、ページ末資料の指標説明を参照。

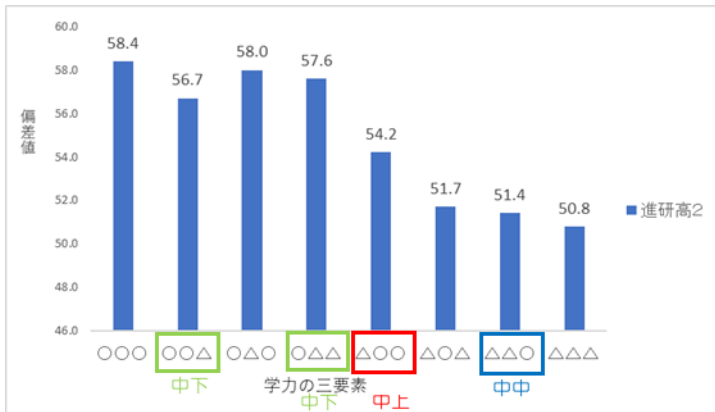
(ステップ2)

学力の三要素における残りの4タイプを「中」とする。図表4（教科学力）、図表5（LEADSの指標）よりこれら4タイプの特徴が相当異なることが明らかなので、「中」の下位次元を「中上」「中中」「中下」と設けて再分類を行っていく。

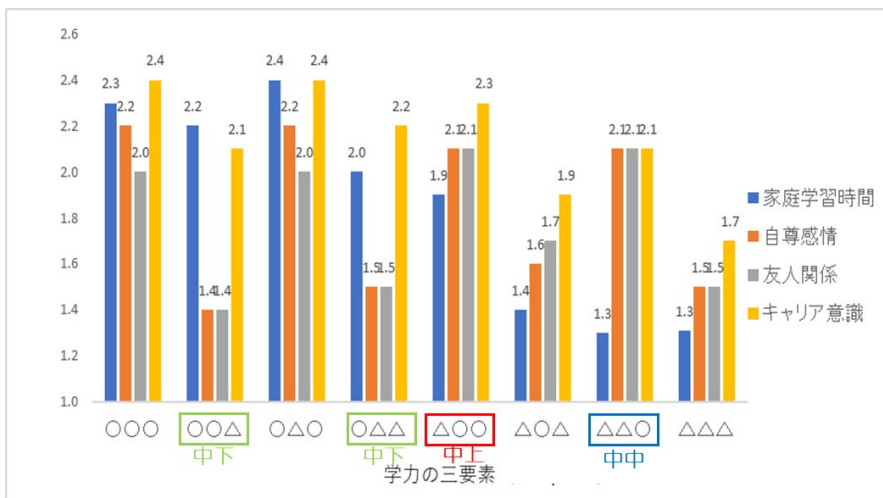


コンピテンシーが△であることはトランジションの観点から見て不十分なので（ステップ1を参照）、まず、教科学力は高いがコンピテンシーが低い○○△、○△△を「中下」と再分類する。両タイプともに、自尊感情、友人関係の得点がとても低く、10年トランジション調査の結果（前述）を踏まえて考えても、大学進学後の成長が弱い可能性を指摘することができる。

残る△○○と△△○であるが、△○○は教科学力が不十分なので、進研模試の偏差値は全タイプの中で中程度となっている（図表4）。妥当な結果である。にもかかわらず、LEADS指標の得点は「上」と近い特徴を持っており（図表5）、トランジションの観点から考えれば、大学進学後の成長の可能性を期待することができる。他方で、△△○は家庭学習時間がとても短く、自律的に学ばないタイプである。△○○より1つランクを落として再分類すべきと考えられるので、以上の結果、△○○を「中上」と、△△○を「中中」と再分類する。



図表4 学力の三要素タイプと進研模試との関連



図表5 学力の三要素タイプとLEADS各種指標との関連

*「家庭学習時間」～「キャリア意識」の得点は、ページ末資料の指標説明を参照。

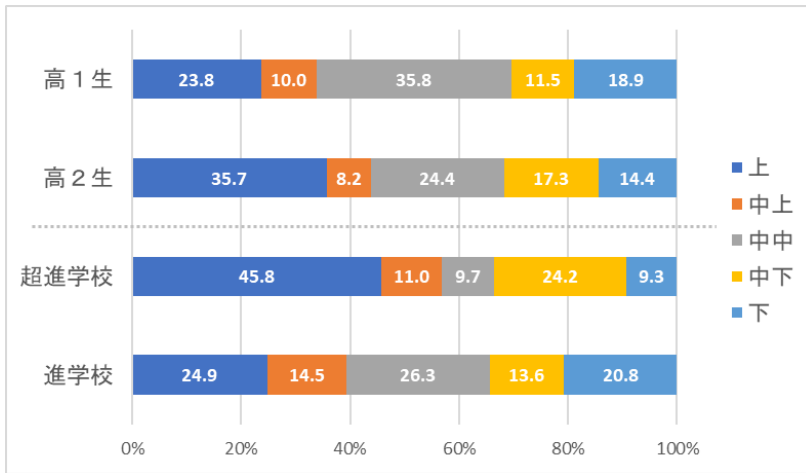
4. 桐蔭学園の事例

桐蔭学園の高校2年生（2018年度）のデータを用いて、再分類した結果を示す。桐蔭学園の高校段階は、「中等教育学校」「高校男子部（理数科・普通科）」「高校女子部（理数コース・普通コース）」の大きく3つの（異なる）学校に分かれているが（注）、ここではこれらすべてを合算して分析している。図表1に合わせて言えば、進学校から中堅校までの学校・学科・コースを混ぜ合わせた分析となる。以下、2つの分析結果を示す。

（注）桐蔭学園高等学校は2018年度入学者より共学化・3コース制（プロGRESS・アドバンス・スタンダードコース）へと改編されている。ここでは改編前の学校の生徒たちのデータを用いている。

「2」に基づいて、河合塾よりフィードバックされた学力の三要素タイプをトランジションタイプへと再分類し、高1生（5月に実施）と高2生（12月に実施）の「上」～「下」の割合を示したものが図表6である。図表1で示される全国の「超進学校」「進学校」のベンチマークの数値も併せて示す。以下は考察である。

- ・高1生から高2生にかけて「上」が増加し（23.8→35.7%）、「下」が減少している（18.9→14.4%）。
- ・ベンチマークデータと比較すると、桐蔭学園の平均（高2生）は、「上」「下」では進学校の状況より良いが、超進学校の状況には及ばない。



図表6 高1生と高2生のトランジションタイプの割合 (分析1)

*ベンチマークとなる「超進学校」「進学校」の数値は図表1のものである。

図表7は、同一個人の高1生から高2生へのトランジションタイプの移動を示したものである。以下は考察である。

- ・高1生から高2生にかけて、「中下」「中上」から「上」へ移行した者が多く見られる (それぞれ 33.7%、38.8%)。
- ・上→上 (80.1%)、中中→中中 (53.0%)、中下→中下 (60.2%)、下→下 (46.0%) のように、同じトランジションタイプに留まり、高1生から高2生にかけて変化しない生徒が多く見られる。

		高2生					計
		上	中上	中中	中下	下	
高1生	上	80.1	1.0	3.5	14.4	1.0	100.0
	中上	38.8	18.8	18.8	7.1	16.5	100.0
	中中	18.2	14.9	53.0	4.3	9.6	100.0
	中下	33.7	2.0	0.0	60.2	4.1	100.0
	下	13.7	3.1	13.7	23.6	46.0	100.0

図表7 同一個人の高1生から高2生へのトランジションタイプの移動 (分析2)

※高1生から高2生にかけて30%以上増加したセルの数値を赤字にしている。

文献

溝上慎一 (責任編集) 京都大学高等教育研究開発推進センター・河合塾 (編) (2018). 高大接続の本質—「学校と社会をつなぐ調査」から見えてきた課題— 学事出版

付記

本取り組みは、科学研究費基盤研究(B)(R 元-4)「高大接続・トランジションを見据えた高校 IR とカリキュラムアセスメントの開発 (溝上慎一代表: 課題番号 19H01722)」の助成を受けて行われているものです。

(資料)『学びみらいPASS』の指標説明

- 教科学力
 - (1) 英語
 - (2) 数学
 - (3) 日本語 の模試タイプのテスト

- リテラシー
 - (1) 情報収集力...課題発見・課題解決に必要な情報を見定め、適切な手段を用いて収集・調査、整理する力
 - (2) 情報分析力...収集した個々の情報を多角的に分析し、現状を正確に把握する力
 - (3) 課題発見力...現象や事実のなかに隠れている問題点やその要因を発見し、解決すべき課題を設定する力
 - (4) 構想力...さまざまな条件・制約を考慮して、解決策を吟味・選択し、具体化する力

- コンピテンシー
 - (1) 対人基礎力...下記3つの要素から構成される力である。
 - a) 親和力...相手の立場に立ち、思いやりを持ち、共感的に接することができる。また多様な価値観を柔軟に受け入れることができる
 - b) 協働力...お互いの役割を理解し、情報共有しながら連携してチーム活動することができる。また、時には自分の役割外のことも進んで助けることができる
 - c) 統率力...どんな場・どんな相手に対しても臆せず発言でき、自分の考えをわかりやすく伝えることができる。またそのことが議論の活性化につながることを知っており、周囲にもそれをしよう働きかけることができる
 - (2) 対自己基礎力...下記3つの要素から構成される力である。
 - a) 感情制御力...自分の感情や気持ちをつかみ、状況にあわせ言動をコントロールできる。また落ち込んだり、動揺したりした時に、自分で気持ちを立て直すことができる
 - b) 自信創出力...他者と自分の行き違いを認め、自分の強みを認識することができる。また、「やればなんとかなる。自分がやるなら大丈夫」と自分を信頼し、奮い立たせることができる
 - c) 行動持続力...一度決めたこと、やり始めたことは粘り強く取り組みやり遂げることができる。またそれは自分が自分の意思・判断で行っていることだと納得をして取り組むことができる
 - (3) 対課題基礎力...下記3つの要素から構成される力である。
 - a) 課題発見力...さまざまな角度から情報を集め、分析し、本質的な問題の全体を捉えることができる。また、原因は何なのかを特定し、課題を抽出することができる
 - b) 計画立案力...目標の実現や課題解決に向けた見通しを立てることができる。また、その計画

が妥当なものであるか、一貫した関連性があるものかを評価し、ブラッシュアップできる

- c) 実践力...幅広い視点からリスクを想定し、事前に対策を講じることができる。また、得られた結果に対しても検証をし、次回の改善につなげることができる

● LEADS

(1) 家庭学習時間

Q「学校での授業以外の学習時間は? _____時間」

※授業に関連した宿題や課題、授業に関連しない自主学習、塾や予備校、家庭教師、自主学習など、あらゆる勉強を含む

※数値は時間の平均点

(2) 自尊感情

「私は自分に満足している」「私は自分自身に対して前向きな態度をとっている」など6項目の自尊感情尺度

※評定は(4)はい～(1)いいえの4件法。得点レンジは1～4点

(3) 友人関係(5件法)

「初対面の人とでもすぐに友だちになる」「悩みごとなど相談できる友だちがいる」など3項目の友人関係尺度

※評定は(5)あてはまる～(1)あてはまらないの5件法。得点レンジは1～5点

(4) キャリア意識

「どのような進学先(大学や学部など)にするかをどの程度考えていますか」「進学先を卒業後、どのような職業に就きたいか、どのような仕事をしたいか、その見通しをどの程度持っていますか」など3項目のキャリア意識尺度

※評定は(1)よく考えている～(4)考えていないの4件法。得点化の際には1点を4点、2点を3点というように逆転処理をして計算している。得点レンジは1～4点

『学びみらいPASS』に関するお問い合わせは、河合塾の営業担当もしくは下記にお願いします。
河合塾アセスメント事業推進部
(email) mat@kawai-juku.ac.jp
(電話) 03-6811-5510